

## 保育者養成課程に在籍している学生の心理的特徴と子どもに関わる意識の検討(2)

－ 1 年次から 2 年次にかけての縦断的検討－

### A Longitudinal Study of College Life perspective and School Adjustment.

金子 泰之

KANEKO Yasuyuki

キーワード：青年期、学校適応、縦断研究

Keywords: Adolescent, School Adjustment, Longitudinal Study

本研究の目的は、縦断調査を用いて、時間の過ごし方のタイプ別にその心理的特徴について検討し、大学生活の過ごし方によって大学生がどう変化するかを心理学的に明らかにすることであった。具体的には、時間の過ごし方のタイプ別と時間の過ごし方の満足度別に、青年の心理的自立、目標意識、保育者を志望する動機、保育者効力感がどう変化していくのか、1 年次と 2 年次の 2 回にわたる縦断調査から検討した。保育者養成課程に在籍する学生を対象とし、1 回目と 2 回目の両方の調査に回答のあった 137 名を分析対象とした。

大学生活における時間の使い方のタイプとしては、高活動群、大学生活満喫群、授業出席勉強群、低活動群、対人交際群の 5 つの群が抽出された。次に、時間の使い方の満足度について、満足度低群と満足度高群に分けた。時間の使い方のタイプ (5) × 時間の使い方の満足度 (2) × 調査時期 (2) を独立変数とし、青年の心理的自立、目標意識、保育者を志望する動機、保育者効力感を従属変数とした 3 要因の分散分析を行った。その結果、時間の使い方に満足していない低活動群は、1 年次から 2 年次にかけての心理的自立(情緒的コントロール)が低下していた。大学生活において、学業だけでなくそれ以外の領域である対人交際など、すべてにおいて活動量の低い過ごし方をしている学生の場合、心理的自立が妨げられることが明らかとなった。

#### 問題と目的

学生は大学入学後、学業、アルバイト、友人や恋人との時間、課外活動や趣味など、自分なりの興味関心に合わせて時間をやりくりし、大学生活を過ごす。生活のためにアルバイトに多くの時間を割く学生、サークルやインターンシップなどの活動を通して幅広い年齢層と関わる学生など、大学生活の過ごし方によって得られる経験も変わってくる。限られた時間を学生はどのように過ごしているのか、また時間の過ごし方によって、学生の心理的特徴にどのような違いがあるのだろうか。

大学生活の過ごし方の質問項目(溝上, 2009)を使い、大学生活における時間の過ごし方と大学生の心理的特徴の関係が明らかにされてきた(都筑・早川・村井・早川・金子, 2011; 都筑・早川・村井・早川・金子, 2012; 都筑・早川・村井・早川・金子・永井・梁,

2013)。大学生生活における時間の過ごし方のタイプとして6つのタイプが抽出されている(都筑・早川・村井・早川・金子・永井・梁, 2013)。1つ目は、インターネット・漫画・ゲームなどへの時間配分が多いヴァーチャル活動群である。2つ目は、大学の授業、自主的な勉強、対人交際、インターネット・漫画・ゲーム、すべての領域における時間の使い方が平均よりも低い低活動群である。3つ目は、大学の授業と対人交際に対して時間配分が多い対人活動中心群である。4つ目は、授業外の自主的な勉強、対人交際、インターネット・漫画・ゲームへの時間配分が多く、大学の授業は平均程度の高活動群である。5つ目は、授業外の自主的な勉強への時間配分が多く、大学の授業への時間配分は平均より少し多い自主勉強群である。6つ目は、大学の授業への時間配分は平均より少し多いが、それ以外の自主的な勉強、対人交際、インターネット・漫画・ゲームへの時間配分は平均よりも少ない授業出席勉強群である。ここで特徴的な傾向を示したのは、ヴァーチャル活動群であった。ヴァーチャル活動群は、予想外の事態や見通しの立たない中でも柔軟に対応できるといったハーディネス得点が低く、自己効力感や目標意識が低かった。それに対して、対人活動中心群と高活動群はコミュニケーション能力、クリティカルシンキング、ハーディネスの得点が高かった。

上述した大学生の傾向は、4年制大学の文系学部に所属する学生の傾向である。2年制の保育者養成課程に在籍する学生場合、2年間という短い時間の中で授業や実習をこなしながら、サークルやアルバイトをしている。保育者養成課程に在籍する学生の時間の使い方は、一般的な4年制大学の学生とは異なる。学生時代に学ぶ内容が、将来の進路との結びつきが強いことから、学生生活をどう過ごすのか、その意識においても違いがあると推測される。2年制の保育者養成課程に在籍する学生が、学生生活においてどのような時間の使い方しているのか、時間の過ごし方のタイプ別にどのような心理的特徴があるのかを明らかにすることは、保育者養成課程に在籍する学生への指導を行う際に、手がかりとなる情報となるだろう。金子(2013)は、保育者養成課程の学生を対象に、時間の過ごし方のタイプ別に心理的特徴を検討した。時間の過ごし方のタイプとしては、5つの群が抽出された。1つ目は、大学生生活のすべての領域が平均以上の高活動群であった。2つ目は、大学の授業への取り組みと友達関係の領域が平均以上の大学生生活満喫群であった。3つ目は、大学の授業への取り組みのみが平均以上であり、それ以外の領域は平均以下で、対人交際の得点が顕著に低い授業出席勉強群であった。4つ目は、すべての領域が平均以下で、大学の授業への取り組みの得点が顕著に低い低活動群であった。5つ目は、自主的な勉強は平均より低いが、それ以外の領域は平均以上であり、対人交際の得点が顕著に高い対人交際群であった。4年制大学で調査した際(都筑ら, 2013)には、ヴァーチャル活動群が抽出されていたが、保育者養成課程の学生を対象とした調査(金子, 2013)では抽出されなかった。

5つの群を比較したところ、顕著な特徴が見られたのが大学生生活満喫群と低活動群であった。大学生生活満喫群は、予想外の事態に対しても臨機応変に対応するハーディネスの得点や大学生生活充実感の得点が高かった。一方、低活動群は、大学生生活へのフィット感が低く、大学生生活にうまく適応できていないと推察された。また、低活動群は、授業の内容とは関係ない私語の多さも見られた。

時間の過ごし方のタイプ別に、保育者養成課程に在籍する学生の心理的特徴が明らかとなったが、課題は学生の成長をとらえられていない点である。これまでの都筑ら(2013)の調査についても、横断調査からの検討で終わっている。時間の過ごし方のタイプによって、

その後、学生の何が変化し、何が変わらないのか、学生生活の中での学生の成長をとらえることも必要である。

そこで本研究では、縦断調査を用いて、時間の過ごし方のタイプについて検討する。具体的には、時間の過ごし方のタイプ別と時間の過ごし方の満足度別に、青年の心理的自立、目標意識、保育者を志望する動機、保育者効力感がどう変化していくのか、1年次と2年次の2回にわたる縦断調査から明らかにする。

## 方法

### 調査協力者と調査時期

東海地方にある短期大学部保育科の学生を対象に縦断調査を実施した。調査は2回、実施した。1回目の調査は、1年次、後期の授業が開始した2013年9月であった。大学生活に慣れてきた頃に調査を実施するために1年次の9月に実施した。

2回目の調査は、2年次、後期の授業が終わる2015年1月であった。2年間の大学生活を振り返りながら授業時間内に調査を実施した。2回の調査に回答があり、回答に不備のあった調査票を除外すると217名中137名が分析対象であった。内訳は男性5名、女性132名であった。

### 手続き

授業時間内にアンケートを配布し、一斉に調査を行った。アンケートのフェイスシートには、調査に関する説明文を掲載した。アンケート実施にあたってアンケートは成績とは関係ないこと、回答を強制するものではなく、任意であることを説明した。個人を特定し分析することが目的ではなく、全体で分析すること、アンケートは溶解処理することを説明してからアンケートを実施した。得られた結果については、学術目的以外では使用しないことも説明した。これらは、古澤・斉藤・都筑(2000)の心理学・倫理ガイドブックを参考に行った。

### 調査内容

**大学生生活の過ごし方** 大学生生活の過ごし方尺度(溝上, 2009), 17項目を用いた。学業(勉強のための本を読む, 授業とは関係のない勉強を自主的にする, 大学で授業や実習に参加する), クラブ・サークル活動(クラブ・サークル活動・部活動をする), 異性・同性の友達との交際(異性の友達と交際する, 同性の友達と交際する, コンパや懇親会などに参加する), 娯楽(テレビを見る, インターネットサーフィンをする, ゲームなどをする)などの項目から構成されていた。1週間に費やす時間数を, (1) 全然ない, (2) 1時間未満, (3) 1~2時間, (4) 3~5時間, (5) 6~10時間, (6) 11~15時間, (7) 16~20時間, (8) 21時間以上の8段階評定で回答を求めた。

**時間の使い方の満足度** 日頃の時間の使い方に関する満足度を聞く質問項目(Benesse教育開発センター, 2009)を用いた。あなたの日頃の時間の使い方は, 100点満点で, だいたい何点くらいだと思いますか?という教示のもと, 0点から100点までの11段階で回答を求めた。

**青年の心理的自立** 5つの下位尺度(自我の確立, 情緒的なコントロール, 自己決定と責任, 人生への積極的態度, 個別性の未確立)から構成される青年の心理的自立に関する項目(山田, 2011)のうち, 各因子に負荷量の高かった上位3項目, 計15項目を用いた。自我の確立(物事に対し, 自分の意見をはっきり主張できる), 情緒的なコントロール(喜びや怒り,

悲しみなどの感情をコントロールすることができる)、自己決定と責任(困難な問題に遭遇しても、できるだけ自分で解決しようとする)、人生への積極的態度(自分の人生を自分で切り開いている)、個別性の未確立(誰かと一緒にいないと落ち着かない)などの項目から構成されていた。今のあなた自身にどれくらい当てはまりますか?という教示のもと、全く当てはまらない(1点)から非常に当てはまる(5点)の5件法で回答を求めた。

**目標意識** 青年期の目標意識尺度(都筑, 1999)のうち、将来への希望(自分の将来は自分で切り開く自信がある)、時間管理(私は自分がしたいことを全部できるよう、毎日毎日を管理した時間配分をしている)、計画性(私はその日にしなければならないことを計画してから活動する)の3つの下位尺度の20項目を用いた。今のあなた自身の考え方や感情にどれくらい当てはまりますか?という教示のもと、全くそう思わない(1点)からとてもそう思う(5点)の5件法で回答を求めた。

**保育者志望動機** 5つの下位尺度(憧れ、適性、やりがい、無目的同調、専門職志向)から構成される保育者を志望する動機に関する項目(長谷部, 2006)のうち、各因子に負荷量の高かった上位3項目、計15項目を用いた。憧れ(幼稚園教諭・保育士にあこがれて)、適性(子どもと関わる仕事をしたいから)、やりがい(やりがいのある仕事だから)、無目的同調(他に適当な職業がないから)、専門職志向(一生続けることのできる職業だから)などの項目から構成されていた。あなたが保育者を志望するのはなぜですか?という教示のもと、全く当てはまらない(1点)から非常に当てはまる(5点)の5件法で回答を求めた。

**保育者効力感** 保育者効力感に関する項目(三木・桜井, 1998)のうち、負荷量の高かった上位4項目を用いた。“私は、1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う”、“私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う”などの項目から構成されていた。あなたが保育士や幼稚園教諭として働くとしたら、次に書かれている文章は、あなた自身にどれくらい当てはまりますか?という教示のもと、全く当てはまらない(1点)から非常に当てはまる(5点)の5件法で回答を求めた。

## 結果

### 時間の過ごし方のタイプ分けと時間の使い方の満足度の群分け

大学生活における時間の過ごし方については、都筑ら(2013)の結果を参考に、4因子構造として解釈し得点を算出した。授業外の自主的勉強、対人交際、インターネット・マンガ・ゲーム、大学の授業・勉強の4因子であった。次に、1年次における回答をもとに大学生活の過ごし方タイプをクラスター分析(ward法)によって抽出したところ、5つの群が抽出された。5つの群ごとに、大学生活における時間の過ごし方の4下位尺度のzスコアを図示した(Figure 1)。すべての得点が平均以上の群を高活動群(27名)と命名した。対人交際と大学の勉強の得点が平均以上の群を大学生活満喫群(38名)と命名した。大学の勉強の得点のみが平均以上の群を授業出席勉強群(65名)と命名した。すべての領域が平均以下の群を低活動群(29名)と命名した。自主的勉強は平均よりも低いが、それ以外の領域は平均以上であり、特に対人交際の得点が顕著に高い群を対人交際群(21名)と命名した。

時間の使い方の満足度についても群分けを行った。中央値(60点)をもとに、0点から50点までを時間の使い方の満足度低群(70名)、70点から100点までを時間の使い方満足度高群(67名)とした。

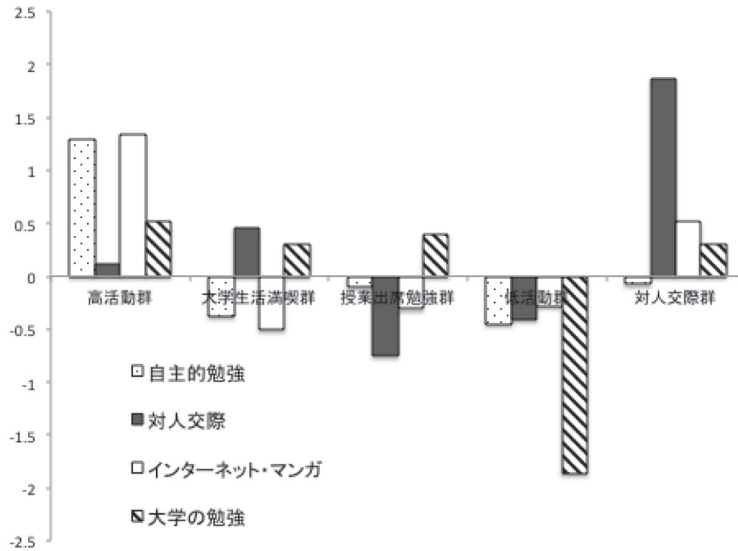


Figure 1 大学生生活の過ごし方のタイプ

時間の過ごし方のタイプ×時間の満足度×調査時期による得点の比較

時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) を独立変数とし、青年の心理的自立 (Table 1), 青年期の目標意識 (Table 2), 保育者を志望する動機 (Table 3), 保育者効力感 (Table 4) を従属変数とした 3 要因の分散分析を行った。

Table 1 時間タイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の心理的自立得点

		自我の確立		情緒的コントロール		自己決定と責任		人生への積極的態度		個性性の未確立	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
高活動群	時間満足低群	3.19 (0.60)	3.33 (0.57)	3.22 (0.74)	3.07 (0.87)	3.74 (0.72)	3.22 (0.78)	2.67 (0.47)	2.70 (0.69)	2.48 (1.24)	2.44 (0.79)
	時間満足高群	3.64 (0.80)	3.73 (0.74)	3.48 (0.87)	3.42 (0.81)	3.79 (0.63)	3.67 (0.59)	3.58 (0.70)	3.24 (0.74)	2.36 (0.94)	2.48 (0.88)
大学生生活満足群	時間満足低群	3.30 (0.72)	3.55 (0.65)	3.55 (0.70)	3.82 (0.67)	3.37 (0.67)	3.37 (0.53)	3.03 (0.69)	3.21 (0.54)	2.45 (1.01)	2.42 (0.77)
	時間満足高群	3.59 (1.01)	3.44 (0.83)	3.70 (0.74)	3.44 (0.89)	3.73 (0.54)	3.60 (0.56)	3.49 (0.71)	3.17 (0.70)	2.60 (0.76)	2.53 (0.51)
授業出席勉強群	時間満足低群	3.00 (0.77)	3.06 (0.77)	3.49 (0.65)	3.43 (0.67)	3.46 (0.64)	3.32 (0.67)	3.17 (0.67)	3.18 (0.85)	2.47 (0.85)	2.31 (0.73)
	時間満足高群	3.21 (0.68)	3.35 (0.85)	3.83 (0.64)	3.50 (0.86)	3.73 (0.44)	3.52 (0.67)	3.65 (0.57)	3.58 (0.68)	2.33 (0.51)	2.58 (0.71)
低活動群	時間満足低群	3.36 (0.99)	3.31 (1.08)	3.60 (1.03)	2.86 (0.91)	3.21 (0.60)	3.17 (0.73)	2.88 (0.91)	2.90 (1.08)	2.64 (1.16)	2.60 (0.79)
	時間満足高群	2.86 (0.69)	3.00 (0.57)	3.33 (0.72)	3.57 (0.56)	3.62 (0.75)	3.52 (0.53)	3.19 (0.46)	3.19 (0.53)	2.33 (1.20)	2.67 (0.43)
対人交際群	時間満足低群	3.33 (0.47)	3.00 (1.12)	3.50 (1.23)	3.67 (0.47)	3.67 (0.90)	3.83 (0.83)	3.33 (0.54)	3.50 (1.00)	2.17 (0.69)	2.33 (0.86)
	時間満足高群	3.94 (0.70)	3.67 (0.60)	4.12 (0.70)	3.97 (0.78)	3.53 (0.89)	3.38 (0.83)	3.72 (0.95)	3.83 (0.79)	2.72 (0.90)	2.78 (1.10)

( ) は標準偏差



青年の心理的自立における自我の確立において、調査時期の主効果 ( $F(1,126)=0.003, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプの主効果 ( $F(4,126)=1.48, n.s.$ )、時間満足度の主効果 ( $F(1,126)=1.86, n.s.$ )、時間タイプ×時間満足度の交互作用 ( $F(4,126)=1.21, n.s.$ )、調査時期×時間タイプの交互作用 ( $F(4,126)=1.05, n.s.$ )、調査時期×時間満足度の交互作用 ( $F(1,126)=0.03, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 ( $F(4,126)=0.78, n.s.$ ) であった。有意な差は見られなかった。

青年の心理的自立における情緒的コントロールにおいて、調査時期の主効果 ( $F(1,125)=1.59, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプ的主効果 ( $F(4,125)=1.76, n.s.$ )、時間満足度の主効果 ( $F(1,125)=2.82, p<.10$ )、時間タイプ×時間満足度の交互作用 ( $F(4,125)=0.55, n.s.$ )、調査時期×時間タイプの交互作用 ( $F(1,125)=1.59, n.s.$ )、調査時期×時間満足度の交互作用 ( $F(1,125)=0.003, n.s.$ ) であった。

時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 ( $F(4,125)=2.50, p<.05$ ) が見られた。単純・単純主効果検定の結果、低活動群のうち時間満足度が低い群の情緒的コントロール得点は、1年時 (3.60) より2年時 (2.86) の方が低かった。低活動群のみ、心理的自立のうち情緒的コントロールが低下していることが明らかとなった。

青年の心理的自立における自己決定と責任において、調査時期の主効果 ( $F(1,123)=3.54, p<.10$ )、時間の過ごし方のタイプの主効果 ( $F(4,123)=0.44, n.s.$ )、時間満足度の主効果 ( $F(1,123)=2.29, n.s.$ )、時間タイプ×時間満足度の交互作用 ( $F(4,123)=0.72, n.s.$ )、調査時期×時間タイプの交互作用 ( $F(4,123)=0.70, n.s.$ )、調査時期×時間満足度の交互作用 ( $F(1,123)=0.06, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 ( $F(4,123)=0.71, n.s.$ ) であった。有意な差は見られなかった。

青年の心理的自立における人生への積極的態度において、調査時期の主効果 ( $F(1,126)=0.08, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプの主効果 ( $F(4,126)=2.15, p<.10$ )、時間満足度の主効果 ( $F(1,126)=9.14, p<.01$ )、時間タイプ×時間満足度の交互作用 ( $F(4,126)=0.46, n.s.$ )、調査時期×時間タイプの交互作用 ( $F(4,123)=0.42, n.s.$ )、調査時期×時間満足度の交互作用 ( $F(1,126)=2.56, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 ( $F(4,123)=0.70, n.s.$ ) であった。時間満足度の主効果が有意だったので多重比較を行ったところ、時間満足度高群 (3.47) の方が、時間満足低群 (3.06) よりも人生への積極的態度得点が高かった。大学生生活の時間の使い方に満足している群の方が、人生への積極的態度が高いことが明らかとなった。

青年の心理的自立における個性性の未確立において、調査時期の主効果 ( $F(1,125)=0.65, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプの主効果 ( $F(4,125)=0.12, n.s.$ )、時間満足度の主効果 ( $F(1,125)=0.50, n.s.$ )、時間タイプ×時間満足度の交互作用 ( $F(4,125)=0.35, n.s.$ )、調査時期×時間タイプの交互作用 ( $F(4,125)=0.23, n.s.$ )、調査時期×時間満足度の交互作用 ( $F(1,125)=1.23, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 ( $F(4,125)=0.62, n.s.$ ) であった。有意な差は見られなかった。

Table 2 時間タイプ(5)×時間の満足度(2)×調査時期(2)の目標意識得点

		将来への希望		時間管理		計画性	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
高活動群	時間満足低群	2.50 (0.82)	2.71 (0.37)	3.02 (0.94)	3.11 (0.70)	2.80 (0.37)	2.60 (0.64)
	時間満足高群	3.32 (0.32)	3.18 (0.59)	2.85 (0.76)	3.05 (0.79)	2.98 (0.76)	2.62 (0.64)
大学生生活満喫群	時間満足低群	2.95 (0.49)	2.95 (0.38)	3.13 (0.68)	3.27 (0.55)	2.62 (0.70)	2.73 (0.61)
	時間満足高群	3.08 (0.54)	2.95 (0.41)	2.72 (0.58)	2.89 (0.71)	2.93 (0.67)	3.13 (0.67)
授業出席勉強群	時間満足低群	2.97 (0.57)	2.87 (0.52)	3.09 (0.78)	3.28 (0.77)	2.54 (0.50)	2.50 (0.52)
	時間満足高群	3.31 (0.44)	3.10 (0.37)	2.74 (0.68)	3.09 (0.64)	3.18 (0.74)	3.19 (0.82)
低活動群	時間満足低群	2.56 (0.71)	2.69 (0.64)	3.43 (0.80)	3.47 (0.73)	2.55 (0.59)	2.50 (0.57)
	時間満足高群	2.75 (0.52)	2.91 (0.36)	3.49 (0.64)	3.43 (0.72)	2.57 (0.84)	2.37 (0.62)
対人交際群	時間満足低群	3.20 (0.34)	3.00 (0.60)	2.95 (0.64)	3.10 (1.13)	2.50 (0.25)	2.75 (0.37)
	時間満足高群	3.23 (0.93)	3.20 (0.73)	3.17 (0.93)	3.32 (0.72)	3.07 (1.03)	2.88 (0.79)

( )は標準偏差

目標意識における将来への希望において、調査時期の主効果 ( $F(1,124)=0.33, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプの主効果 ( $F(4,124)=1.86, n.s.$ )、時間満足度の主効果 ( $F(1,124)=6.87, p<.05$ )、時間タイプ×時間満足度の交互作用 ( $F(4,124)=1.07, n.s.$ )、調査時期×時間タイプの交互作用 ( $F(4,124)=1.42, n.s.$ )、調査時期×時間満足度の交互作用 ( $F(1,124)=0.59, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプ(5)×時間の満足度(2)×調査時期(2)の交互作用 ( $F(4,124)=0.61, n.s.$ )であった。

時間満足度の主効果が有意であったので多重比較を行ったところ、時間満足度高群の将来への希望得点(3.10)の方が、時間満足度低群の得点(2.84)よりも高かった。大学生活の時間の使い方に満足している群の方が、将来への希望が高いことが明らかとなった。

目標意識における時間管理において、調査時期の主効果 ( $F(1,125)=0.68, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプの主効果 ( $F(4,125)=1.26, n.s.$ )、時間満足度の主効果 ( $F(1,125)=5.65, p<.05$ )、時間タイプ×時間満足度の交互作用 ( $F(4,125)=1.43, n.s.$ )、調査時期×時間タイプの交互作用 ( $F(4,125)=1.88, n.s.$ )、調査時期×時間満足度の交互作用 ( $F(1,125)=1.11, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプ(5)×時間の満足度(2)×調査時期(2)の交互作用 ( $F(4,125)=0.62, n.s.$ )であった。

時間満足度の主効果が有意であったので多重比較を行ったところ、時間満足度高群の時間管理得点(2.89)の方が、時間満足度低群の得点(2.61)よりも高かった。大学生活の時間の使い方に満足している群の方が、時間管理が高いことが明らかとなった。

目標意識における計画性において、調査時期の主効果 ( $F(1,124)=5.11, p<.05$ )、時間の過ごし

し方のタイプの主効果 (F(4,124)=1.51,n.s.), 時間満足度の主効果 (F(1,124)=0.68,n.s.), 時間タイプ×時間満足度の交互作用 (F(4,124)=0.58,n.s.), 調査時期×時間タイプの交互作用 (F(4,124)=0.64,n.s.), 調査時期×時間満足度の交互作用 (F(1,124)=0.12,n.s.), 時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 (F(4,124)=0.16, n.s.) であった。

調査時期の主効果が有意であったので多重比較を行ったところ, 2 年次の計画性得点 (3.20) の方が, 1 年次の計画性得点 (3.06) よりも高かった。1 年次から 2 年次にかけて計画性が高くなることが明らかとなった。

Table 3 時間タイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の保育者を志望する動機得点

		憧れ		適性		やりがい		無目的同調		専門職志向	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
高活動群	時間満足低群	3.67 (0.81)	3.37 (0.94)	4.44 (0.79)	4.48 (0.76)	3.70 (0.90)	3.26 (1.17)	2.26 (0.96)	2.44 (0.62)	3.59 (0.59)	3.19 (0.68)
	時間満足高群	3.91 (0.66)	3.88 (1.02)	4.73 (0.55)	4.73 (0.35)	4.18 (0.63)	3.58 (0.71)	1.94 (0.64)	1.85 (0.65)	3.00 (0.76)	2.93 (1.15)
大学生生活満喫群	時間満足低群	3.61 (0.85)	3.94 (0.86)	4.36 (0.48)	4.52 (0.43)	3.76 (0.74)	3.79 (0.92)	2.27 (1.07)	1.73 (0.99)	3.06 (0.44)	2.82 (0.43)
	時間満足高群	4.08 (0.65)	3.79 (0.79)	4.76 (0.33)	4.43 (0.71)	3.70 (0.79)	3.63 (0.72)	1.90 (0.93)	2.02 (0.73)	3.08 (0.58)	2.94 (0.62)
授業出席勉強群	時間満足低群	3.98 (0.83)	3.98 (1.02)	4.60 (0.50)	4.53 (0.52)	3.95 (0.70)	3.82 (0.73)	2.09 (0.73)	2.11 (0.76)	2.91 (0.73)	2.76 (0.76)
	時間満足高群	3.87 (0.79)	4.11 (0.73)	4.64 (0.38)	4.71 (0.37)	3.89 (0.94)	3.84 (0.74)	1.58 (0.46)	1.93 (0.58)	3.33 (0.69)	3.42 (0.61)
低活動群	時間満足低群	3.86 (1.05)	3.88 (1.09)	4.67 (0.41)	4.40 (1.04)	3.92 (0.66)	3.69 (1.15)	2.50 (0.97)	2.62 (0.86)	3.12 (0.73)	2.64 (0.80)
	時間満足高群	4.05 (0.73)	3.81 (0.79)	4.57 (0.56)	4.10 (0.49)	4.00 (0.66)	3.43 (0.68)	2.33 (1.21)	2.95 (1.09)	3.19 (0.46)	3.29 (0.93)
対人交際群	時間満足低群	4.17 (0.43)	4.33 (0.47)	4.83 (0.19)	4.67 (0.38)	4.42 (0.78)	4.17 (0.19)	2.00 (0.47)	1.58 (0.95)	2.83 (1.03)	2.92 (1.10)
	時間満足高群	4.33 (0.76)	4.11 (0.89)	4.55 (0.70)	4.79 (0.22)	3.92 (1.19)	3.92 (0.85)	1.53 (0.43)	1.75 (0.58)	3.11 (1.03)	2.89 (0.90)

保育者を志望する動機における憧れにおいて, 調査時期の主効果 (F(1,126)=0.20,n.s.), 時間の過ごし方のタイプの主効果 (F(4,126)=0.91,n.s.), 時間満足度の主効果 (F(1,126)=0.56,n.s.), 時間タイプ×時間満足度の交互作用 (F(4,126)=0.20,n.s.), 調査時期×時間タイプの交互作用 (F(4,126)=1.02,n.s.), 調査時期×時間満足度の交互作用 (F(1,126)=1.69,n.s.), 時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 (F(4,126)=2.65, n.s.) であった。有意な差は見られなかった。

保育者を志望する動機における適正において, 調査時期の主効果 (F(1,125)=1.81,n.s.), 時間の過ごし方のタイプの主効果 (F(4,125)=0.89,n.s.), 時間満足度の主効果 (F(1,125)=0.28,n.s.), 時間タイプ×時間満足度の交互作用 (F(4,125)=0.77,n.s.), 調査時期×時間タイプの交互作用 (F(4,125)=1.46,n.s.), 調査時期×時間満足度の交互作用 (F(1,125)=0.10,n.s.), 時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 (F(4,125)=1.67, n.s.) であった。有意な差は見られなかった。

保育者を志望する動機におけるやりがいにおいて, 調査時期の主効果 (F(1,125)=9.36,p<.01), 時間の過ごし方のタイプの主効果 (F(4,125)=0.86,n.s.), 時間満足度の主効果 (F(1,125)=0.79,n.s.), 時間タイプ×時間満足度の交互作用 (F(4,125)=0.62,n.s.), 調



査時期×時間タイプの交互作用 (F(4,125)=1.93,n.s.), 調査時期×時間満足度の交互作用 (F(1,125)=0.12,n.s.), 時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 (F(4,125)=0.40, n.s.) であった。調査時期の主効果が見られたので多重比較を行ったところ, 1年次のやりがい得点 (3.94) の方が, 2年次のやりがい得点 (3.71) よりも高かった。1年次から2年次にかけて保育に対するやりがいが低下することが明らかとなった。

保育者を志望する動機における無目的同調において, 調査時期の主効果 (F(1,124)=0.62,n.s.), 時間の過ごし方のタイプの主効果 (F(4,124)=4.05,p<.01), 時間満足度の主効果 (F(1,124)=1.71,n.s.), 時間タイプ×時間満足度の交互作用 (F(4,124)=0.56,n.s.), 調査時期×時間タイプの交互作用 (F(4,124)=2.07,p<.10), 調査時期×時間満足度の交互作用 (F(1,124)=6.00,p<.05), 時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 (F(4,124)=1.26, n.s.) であった。

保育者を志望する動機における無目的同調において, 時間の過ごし方のタイプ主効果が見られた (F(4,127)=4.64,p<.01)。低活動群の無目的同調得点(2.60)は, 対人交際群の得点(1.72), 授業出席勉強群の得点 (1.93), 大学生生活満喫群の得点 (2.01) よりも高かった。保育者を志望する動機が, “ただなんとなく” といった明確な目的がない状態で進路選択している可能性が明らかとなった。

保育者を志望する動機における専門職志向において, 調査時期の主効果 (F(1,125)=3.36,p<.10), 時間の過ごし方のタイプの主効果 (F(4,125)=0.46,n.s.), 時間満足度の主効果 (F(1,125)=1.13,n.s.), 時間タイプ×時間満足度の交互作用 (F(4,125)=2.06,n.s.), 調査時期×時間タイプの交互作用 (F(4,125)=0.35,n.s.), 調査時期×時間満足度の交互作用 (F(1,125)=1.44,n.s.), 時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 (F(4,125)=0.64, n.s.) であった。有意な差は見られなかった。

Table 4 時間タイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の保育者効力感得点

		保育者効力感	
		1回目	2回目
高活動群	時間満足低群	3.11 (0.43)	2.89 (0.61)
	時間満足高群	3.41 (0.34)	3.43 (0.75)
大学生生活満喫群	時間満足低群	3.18 (0.50)	3.30 (0.40)
	時間満足高群	3.30 (0.57)	3.19 (0.64)
授業出席勉強群	時間満足低群	3.14 (0.60)	3.14 (0.60)
	時間満足高群	3.28 (0.46)	3.25 (0.59)
低活動群	時間満足低群	2.93 (0.84)	2.52 (0.87)
	時間満足高群	3.40 (0.24)	2.93 (0.88)
対人交際群	時間満足低群	3.06 (0.82)	3.38 (0.25)
	時間満足高群	3.69 (0.41)	3.54 (0.39)

保育者効力感について、調査時期の主効果 ( $F(1,127)=2.55, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプの主効果 ( $F(4,127)=1.68, n.s.$ )、時間満足度の主効果 ( $F(1,127)=0.01, n.s.$ )、時間タイプ×時間満足度の交互作用 ( $F(4,127)=0.85, n.s.$ )、調査時期×時間タイプの交互作用 ( $F(4,127)=2.22, p<.10$ )、調査時期×時間満足度の交互作用 ( $F(1,127)=0.78, n.s.$ )、時間の過ごし方のタイプ (5) ×時間の満足度 (2) ×調査時期 (2) の交互作用 ( $F(4,127)=0.81, n.s.$ ) であった。有意な差は見られなかった。

### 考察

本研究の目的は、大学生活の時間の過ごし方のタイプについて、縦断調査から検討することであった。具体的には、時間の過ごし方のタイプ別と時間の過ごし方の満足度別に、青年の心理的自立、目標意識、保育者を志望する動機、保育者効力感がどう変化していくのか、1年次と2年次の2回にわたる縦断調査から明らかにした。

時間の使い方のタイプで変化が見られたのは、低活動群の中で大学生活の時間の使い方に満足していない群であった。この群は、1年次から2年次にかけて青年の心理的自立の中の情緒的コントロールが低下していた。全体的な活動量が低いのが低活動群である。大学生活における活動量が全体的に低い中で、それに対しての自己評価が低く、自分ではなんとかしたいと葛藤を抱えている群であると推察される。葛藤を抱えながら大学生活を続けている大学生活への適応がうまくいっていない状況が心理的自立の低下につながっていると考えられる。

調査時期の影響は、目標意識の計画性と、保育者を志望する動機のやりがいにおいて見られた。計画性は1年次から2年次にかけて得点が上がっていた。実習や就職活動を経験することによって、学生は計画性を意識しながら生活できるようになったのだと考えられる。保育者を志望する動機のやりがいについては、1年次から2年次にかけて得点が低下していた。1回目の調査を実施したのは、資格取得のための実習をまだ経験していない1年次の9月であり、2回目の調査は卒業を目前に控えた2年次の1月である。大学での講義や実習を経験する中で、保育の仕事の実態を知ったこと、保育者の労働環境などの実態を知ったことが、こうした意識の変化に影響していると言えるだろう。

今回の分析では、1年次の大学生活の過ごし方のタイプがそのまま2年次にかけて維持されるという前提で分析を行った。しかし、1年次の時間の過ごし方のタイプと2年次の時間の過ごし方のタイプが異なっている可能性もある。学生生活の中で、時間の過ごし方のタイプが変わる学生の存在をとらえきれていない点が本研究の課題である。

### 引用文献

- Benesse 教育研究開発センター 2009 放課後の生活時間調査報告書—小・中・高校生を対象に— 研究所報, vol.55.
- 古澤頼雄・斉藤こずゑ・都筑学 2000 心理学・倫理ガイドブック 有斐閣
- 長谷部比呂美 2006 保育者をめざす学生の志望動機と資質能力の自己評価 淑徳短期大学研究紀要, 45,115-130.
- 金子泰之 2013 保育者養成課程に在籍している学生の心理的特徴と子どもに関わる意識の検討—大学生活の過ごし方のタイプ別による検討— 常葉大学短期大学部紀要, 44, 143-

156.

- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, 46,203-211.
- 溝上慎一 2009 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討 - 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す- 京都大学高等教育研究, 15,107-118.
- 都筑学 1999 大学生の時間的展望-構造モデルの心理学的検討 中央大学出版部
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 2011 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 中央大学保健体育研究所紀要, 29,7-33.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 2012 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討(2) 中央大学保健体育研究所紀要, 30,1-33.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之・永井暁行・梁晋衡 2013 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討(3) 中央大学保健体育研究所紀要, 31,1-34.
- 山田裕子 2011 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連 青年心理学研究, 23, 1-18.

